

につき、わが国におけるこれまでの報告例との比較と精神病理について若干の考察を行った。

本例は、56歳の既婚男性である。51歳で分裂病様症状が初めて発現するまでの社会適応はよく、精神疾患の遺伝負因も認められない。対人接触はよく、無為・自閉、人格の荒廃などもなく経過からみて定型的分裂病とは言い難いものである。両眼の乳頭周囲網膜脈絡膜萎縮のため眼が疲れ易くなり50歳で金具付の仕事をやめざるを得なかったが、強度の視力低下のため職もみつからず職安通いをしてきた。大家より老朽化を理由にアパートの立ち退きを要求されていた。丁度その頃、大雪の際、雪掘りの件で隣近所とのいざこざを契機に、「人の言葉が悪口に聞こえてくる」、「誰かが家を壊す」などの幻聴、被害妄想が出現し怒りっぽくなった。夜間にめまいを覚え日赤神経内科を受診、田宮病院を紹介された。敏感関係妄想の疑い、或いは退行期精神障害の疑いにて Perphenazine 6mg を処方され、1週間の服薬のみで幻聴は消失し気分も改善した。その後、注察妄想、幻聴に加え、幻視、嫉妬妄想、独語、不眠が出現、夜中に突然大声を出し易怒的となり妻に暴力をふるうようになって田宮病院に入院した(52歳)。電波体験もみられたが haloperidol 2.25mg のみで程なく分裂病様症状はとれ、翌月には軽快退院した。転居し2年間は安定していた。一時、血尿や腹部症状に伴い幻聴が出現したことがある。その後2回入院歴がある。いずれの時も分裂病様症状を呈したが、程度は軽く持続しなかった。病期が気分の変化を基底に相性に出現するようにみえる。病期は、不機嫌で怒りっぽく、また性的逸脱行為も時にみられた。発熱、浮腫、胸苦しさ、遺尿などの身体症状が同時に出現している。なお、3回目の入院時に主治医が変更され、腕窩毛が無く、声がカン高い、また子供がいないことなどから Klinefelter 症候群が疑われ、染色体検査により「47, XXY」個体であることが判明したものである。ホルモン定量は、LH, FSH が正常値より高く、E<sub>2</sub> は低い。又、progesterone, testosterone の値は正常範囲であった。EEG では、やや高振巾の diffuse  $\alpha$  pattern, 速波が前頭優位に出現、まれに前頭部に  $\theta$  波の連続がある。後頭部に軽度の左右差がみられた。脳 CT では、第四脳室から左右の側脳室にかけて、中～高度の脳室拡大がみられた。田中 Binet で IQ=42, WAIS で言語性 IQ<60, 動作性 IQ=63 であり、軽度の精神薄弱と判定された。これらの所見は、これまでの報告例のものと概むね一致する。また本例は、発病に際しての状況に対する反応性の要素が強く、精神力動も比較的みやすい

など、精神病理上の特徴も文献例と似ている。治療的には、夫である患者に対し不信と怖れを抱く妻に受容的精神療法を重ねた結果、夫を受け入れられるようになり退院が可能となった。患者には、本症候群の特徴とされる依存一攻撃の葛藤(内海ら, 1982)を踏まえて接したことが治療的に効果があったと思われる。完全寛解に到り退院し、現在は夫婦共に安定している。

#### 6) 精神分裂病と脳萎縮—慢性期陽性症状群、陰性症状群における比較検討—

江口 孝・黒崎 孝則(群馬県立佐波病院)

##### <対象及び方法>

群馬県立佐波病院に入院中の精神分裂病患者の中から、外来通院期間も含め、最近5年間の病像がほぼ定着してきている症例を、慢性期陽性症状群、陰性症状群の2群に分類し、そのうち検査協力可能例を、それぞれ18例、計36例に CT-scan を施行し、脳波所見などとあわせ、脳萎縮の形態、及び程度を2群の間で比較検討した。

##### <結論>

- 36例中、脳萎縮が認められたものは19例(52.8%)であった。
- 2群とも大脳皮質萎縮例が最も多く、CTで何らかの異常所見を呈した22例中、18例(72.7%)を占めた。また大脳皮質萎縮例を、前頭葉、側頭葉、びまん性萎縮、中心性萎縮に分類した場合、陽性症状群では4つのタイプが2例づつ認められたが、陰性症状群では、前頭萎縮9例、びまん性萎縮4例と、2つのタイプに限られた。
- 陽性症状群の中には、大脳皮質に萎縮は認められないものの、脳室拡大が認められる中心性脳萎縮が2例に認められた。
- 小脳の萎縮は5例(13.9%)に認められ、そのうちの4例は陰性症状群であった。
- 大脳全汎性萎縮例6例(陽性症状群2例、陰性症状群4例)では、5例に EEG 所見で、安静閉眼時、 $\beta$ 活動が中心であるような何らかの異常が認められた。

#### 7) 精神科における肥満対策としてのグアールガム(ニューキャロブ)の使用経験

山口 勇司・斎藤 健利(田宮病院)  
田宮 崇・三宅 章

一般に精神科入院患者は肥満が多いと言われる。そこで当院開放病棟の患者(868名、平均年齢  $\pm 1SD$  44±

12才, ♀65名, 44±11才)と職員(♂67名, 39±14才, ♀102名, 37±13才)を対比し肥満の現状を調査した。肥満度算出法は Broca 法や桂変法が一般的であるが低身長者を肥満と過大評価する。そのため今回は, 日本の大手保険会社が発表した死亡率より得た理想体重をもとに肥満度を算出した。患者群における肥満度 ( $\bar{x} \pm 1SD$  ♂ 4.6±14, ♀9.9±19)は職員群(♂ -1.3±12, ♀1.1±13)に比べ有意に肥満傾向を示し, 特に女性で顕著であった。さらに肥満度と血中脂質の関係は, HDLC で男性において有意に肥満度と逆相関を示した。また肥満度20以上の肥満群と非肥満群に層別すると TC が 250 mg/dl 以上の高脂血症例が肥満群で 21% 非肥満群で 5% 存在した。(VLDL+LDL)/HDL では肥満群で有意に高値を示した。

次に肥満の要因について分析した。患者の日程から求めた消費熱量は約 1,900kcal と給食等による摂取熱量の 2,000kcal +間食を<sup>2</sup>下回っており職員群の 8 割であった。患者の運動量として1日の平均歩数は 4800±2400 歩と職員群の 5 割であった。8 項目の体力テストの結果は患者群で動的体力の低下が顕著であった。

当院の肥満対策として肥満教室を組織し栄養・生活指導やレク活動・行動療法を実施するとともに, グアーガムを用い希望した患者に10週投与して体重の変化を観察した。この食品はガラクトマンナンを主成分とするもので1次的な体重減少が目的と受けとられるが, 真の狙いは肥満解消の動機づけとして利用するものである。10週後の 2kg 以上の体重減少者は18名中 4 名で, うち1名が標準体重に達することができた。しかし, 集団としてとらえた場合, 体重の減少・血中脂質に有意な改善は認められなかった。

以上, 減量の動機づけとしてグアーガムを用いたがやせ薬のごとく錯覚又は過信した負の効果もあり, 患者の意欲を最大に盛上げられず, 減量が期待通り進まなかったと考えられる。今後は得られた基礎成績をもとに, 教室のカリキュラムの再構成及び集団での指導に加え, 個別性・自主性を十分考えたアプローチとその継続が必要であると考えられる。

今回の発表は当院における肥満対策の結論ではなく, はじまりであることを付け加え問題提起としてここに報告する。

## 8) 人 格 障 害

— 1 千万円の借金し, 破綻した  
1 症例について—

加藤 佳彦・佐藤 哲哉 (新潟大学精神科)  
飯田 真

Schneider の類型の意志欠如者, ICD-9 の無力性人格障害, DSM-III の非定型人格障害と診断された症例を呈示し, その精神病理と, 患者にとっての借金の多義的意味を考察した。

症例は, 35歳, 男性。3人兄弟の長男で, 成績はよくなく, 学歴で苦労した父親に, 弟たちと比較されながら育った。会社員になってから, 月給を特に何に使ったというわけではないが20日間くらいで使い切り, 約百万円の借金をしたり, 病気になり収入がなく, 金銭的に苦しい状況であったが, 儉約する様子もなくブランド品などを購入し, 約1千万円の借金をしたというエピソードもあった。また, 家を飛び出し, 20歳年上の女性と結婚したこともあった。

なぜ, 20歳年上の女性と結婚したかということ, 患者と母親との関係から考察した。家族内で, 父親に絶対的な権限があったが, 母親は, 服従している患者を充分保護できず, 患者は自分を攻撃してくるものから守り保護してくれそうな, 強い女性に魅力を感じ, 男まさりの年上の女性に好意を持ったと考えられた。

次に, 患者の借金の意味を父親との関係から考察したい。その借金には, 無計画性, 現実的目的性からの遊離性, 発覚後の安堵感などの特異な点があった。一般に精神分析では「金を使うこと」は父との関係の象徴といわれる。したがって, 患者の歪んだ父との関係が, 患者の正常とは少しかけ離れた借金の特徴に写し出されていると考えて, まずまちがいないだろう。患者は父親に対して, 30歳前後の男性にとって特有の父親からの独立と, 患者の父親の高い理想像に到達できないことから生じる父に対する マゾヒズム 的依存という両価的な気持ちを持っていた。つまり, 彼の借金の特徴の無目的性とブランド品の購入などにみられる利那的高揚感を求めるのは, 独立と関係し, 借金が発覚してからのある種の安堵感, 依存と深く関連していた。彼は借金により独立と依存という両価的なテーマを解決しようとしていたと考えられた。